

自己評価報告書(最終報告)

報告者

生活・健康系コース(技術・工業・情報) / 畑中 伸夫

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

- ①学内の研究費の配分が厳しくなる中で、外部資金の獲得は研究を進める上で重要である。科研費は、前任校を含め、毎年応募している。
- ②平成24年度の科研費は、「展開ブランクを用いた気密性を有する深い角筒容器の成形」をテーマに応募している。
- ③平成25年度には、教育大学の教員にふさわしい「教育と科学・技術」をテーマとする課題で応募することを検討している。
- ④科研費のみが、異常に高く評価されていると感じている。科研費獲得が色々な場面で、評価基準とされているが本末転倒であると考える。
- ⑤民間財団の研究助成金や科学技術振興機構の助成金も正しく評価されるべきである。特に、間接経費の取り扱いで科研費との間に差別的対応があるのは不当なことである。

2. 点検・評価

中間報告に記載通り、平成24年度は、科研費(直接経費270万円、間接経費81万円)、金型技術振興財団から80万円、軽金属奨学会から25万円を獲得した。
また、資金ではないが大阪大学接合科学研究所と共同研究を実施することにより、相手方より旅費・実験機器の使用・消耗品の提供を受けるなどしている。
目標に対して、十分な成果を上げたと考える。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

- ①大学院生に確固たる知識・技術・研究能力を身につけさせることが、最重要課題である。これは、長期履修生の増加とともに、不可欠となっている。
- ②大学院の授業においても基礎学力の充実に取り組むことが必要となり、大学院にふさわしいレベルまで引き上げられるよう授業内容の精選や展開の工夫が一層重要になっている。
- ③「教採合格全国一」の反響は大きい。大学院も学部には負けない合格者を出す必要がある。
- ④これらを確実に進めるとともに、本校学生への進学への勧めや他大学の学生への募集活動が有効となる。
- ⑤H24年度は大学院入試委員であり、本コース(技工情)には他大学への募集活動を熱心に取り組んでいる先生がおられることから、先輩の助言を得ながら自らも他大学へ出向く等の募集活動を行うことを検討する。

2. 点検・評価

大学院学生の知識・技術・研究能力の向上のために、修士研究や授業はもちろん日常的な接触の中で努力してきた。大学院入試委員として、大学院説明会はもちろん、受験希望者の相談に綿密に応じてきた。結果的にかなり濃密な相談に応じた件数が2件ある。
他大学への募集活動に参加した。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- ①本コースの特質である「ものづくり」の楽しさを体得させるため担当する全ての科目で取り組む。
- ②3年生担任として、学生が「中だるみ」にならないよう留意し、有意義な学生生活をおくれるよう援助する。学生の不調を早期に発見し、立ち直りを支援する。
- ③学生と日常的な接触を意図的に追及する。前期は担当授業がないため学生と定期的なミーティングを企画する。後期は授業を通して日常的に指導が可能である。
- ④本コース(技工情)では、第3学年から卒業研究の仮配属を行い、コースの教員全員がほぼ週に一度ゼミを行っている。指導教員との連携を強め、綿密な学生支援を心がける。

2. 点検・評価

エネルギー変換工学、流体力学などの授業に「ものづくり教育」を導入し、学生の教材開発能力・技能の向上に努力した。在学中における「最大の行事」である教育実習について、事前・事後指導教員ではないが、学生の相談に対応してきた。全ての学生の教育実習に、最低1回は参観してアドバイスをを行った。

II-2. 研究

1. 目標・計画

- ①専門分野である「塑性加工」に関する研究を継続して進める。研究成果を、1~2報、学術論文として発表する。
- ②科学研究費をはじめ、科学技術振興機構(JST)など外部資金の獲得に努力する。
- ③教育大学の教員として、中学校:技術科教員、高等学校:工業科・情報科教員の具備すべき知識・技術について研究を進める。

2. 点検・評価

学術論文の発表1報、学会講演会における講演2回、学生の発表指導7回、学外共同研究者との連盟発表3回行った。これらの結果は当初計画を上回る成果である。研究テーマの中に、学生の教材開発力を要請する要素を含む内容を取り上げ、研究と教育の有機的な結合に努力した。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

- ①全学的な学校改革の取り組みに積極的に参加する。H23年度コース長の経験を生かし、コースのあり方や全学的な課題についても積極的に提案・推進する。
- ②1年目の大学院入試委員として、本学の運営に貢献する。

2. 点検・評価

全学的な問題へ積極的にかかわる機会には恵まれず、新たな提案をするには至っていない。
大学院入試委員会試験班班長として、入試業務に携わっている。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

- ①附属学校教員(特に中学校技術科教員)と連携を深める。その中で、教材・教具の改善・開発を教育実践フィールド研究や卒業研究を通して取り組む。
- ②産学・産官学連携の研究・製品開発に取り組む。また、地域から依頼があれば「出前授業」等を積極的に実施する。

2. 点検・評価

附属学校運営委員会委員として、附属学校の在り方について検討してきた。
附属中学校とは、学生の教育実習や研究発表会(附属)に参加することにより、交流が深まっている。また、中学生アイデアロボットコンテストではアドバイザーを担当した。
教育実践フィールド研究で取り上げた「ゴーヤの栽培」をもとに、中学校の栽培分野における教育実践についてアンケート調査を実施するなど、新たな結びつきができた。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)